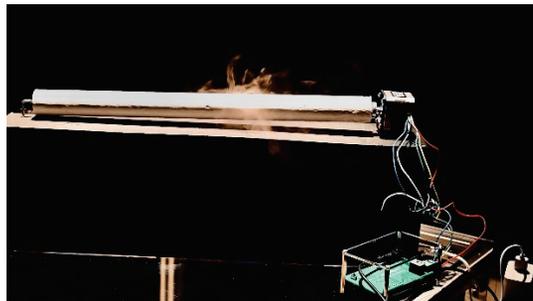


## 古山寧々 「☆と※●#」が私を擬物化すると (2023) メディアインスタレーション

《「☆と※●#」が私を擬物化すると》は、「部屋の中にあるモノ」視点でみた私の動きや姿を想像し、「モノ視点での私」を動く彫刻としてして表現する試みである。モノからみた人間の姿を『擬物化』と名づけ、シリーズとして制作を行なっている。

この作品を作ったのは、Covid-19のパンデミックの中で自宅で一人過ごすことを余儀なくされた時期だった。外の世界から切り離される中で、改めて自分と「部屋の中にあるモノ」との関係性を考え直すきっかけになった。例えば、私が「パソコン」と関わるとき、私は指でキーボードに触れる。このとき「パソコン」からは、私という人間はどのようにみえているのだろうか。「パソコン」にとって、私は「キーボードに触れる」という点で、指のみを身体とする生き物として認識されるのではないだろうか。「パソコン」だけではない。「メガネ」からは、私はどのようにみえているのか？「インターホン」からは？「アイスクリーム」からは？

それぞれのモノには、それぞれの知覚があり、それぞれの世界があると考えてみる。人間は、人間以外のものを人になぞらえて理解したり、表現したりする。このことを「擬人化」という。だとすれば、人間以外のモノが人間を理解する際には、モノは人間をモノになぞらえているかもしれない。そうした、モノが人間をモノになぞらえることを、「擬人化」ならぬ「擬物化」と呼んでみる。「擬物化」された私はきっと、人間とはまるで異なる姿や動きをする、ヘンテコな存在にみえているにちがいない。



左から：「アイスクリームが私を擬物化すると」「ベッドが私を擬物化すると」「パソコンが私を擬物化すると」

古山寧々 Nene Koyama アーティスト。1999年、岐阜県生まれ。多摩美術大学メディア芸術コースを卒業後、同大学院を修了し、現在は東京科学大学情報理工学院の研究者として作品を制作している。作品のテーマは「人間と人間以外の関係」や「人間以外からみた人間」である。これらを探求する中で、電子工作やバイオアートを中心に、科学技術と芸術を融合させた表現方法を模索している最近の展示には、ICCキッズプログラム2023、TUBshowing2023、そして「inter\_」多摩美術大学大学院情報デザイン領域研究成果展2024がある。第29回学生CGアワード入選、2023年度卒業制作優秀作品

<https://nenekoyama.github.io/my-website/>

表紙担当・装丁担当より：シンプルかつ斬新な視点で、かつ、とても巧みに構成された動的なインスタレーションです。すべて動く作品群で、子供から大人まで楽しめるだけでなく、普段と違ったことを色々と考えさせられたり、刺激されたりするeye-openingな展示でした。ぜひ動画でユニークな動きをご覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=zFHOUSewc0> (岩崎秀雄)